

平成二十六年 度

第一回 女子美術大学付属中学校入学試験
国語 〔問題用紙〕 (五〇分)

受験番号
氏 名

解答はすべて別紙解答用紙の解答欄に記入すること。
(試験問題を持ち帰ってはならない)

—

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

毎年八月の半ば^アに、お母さんの実家である新潟^{にいがた}のおばあちゃんの家遊びに行く。そのために、出版社^{しゅつぱん}で働いてるお母さんは、ふだんはいそがしくてもこの時期だけは一週間の休みをとるようにしていた。旅行代理店で働くお父さんはこの時期が一番いそがしいので休みがとれない。

1 おばあちゃんの家には、いつもお母さんと私のふたりきりでかけていた。

おばあちゃんに会うのは、全然かまわなかった。いっしょに住んでるお母さんのお姉さんにあたる光子^{みつこ}おばさんも、市役所で働くおじさんのこともきらいじゃない。部活の強化練習を休むのだって、本当は全然かまわない。

ただ、一つ年下のいとこの千絵ちゃんに会うのが、イヤなのだ。千絵ちゃんは小さいときからわがままで、自分勝手に、いじわるで、そしてなにより私に対する態度は、最悪だった。

「こういうのもつてるっけいらね」

小学一年生のときに、スヌーピーのペンケースをおみやげにもっていくと、千絵ちゃんは包みを開けたとたんにそういい放った。

「お気に入りのマグカップあるしなー」

ムーミンのマグカップをあげたのは、四年生のときだ。

「今ダイエット中だっけいらね」

デイズニーシーのおみやげで缶^{かん}入りのクッキーをもっていたのは、去年のこと。

こんな風に千絵ちゃんは、私がどんなおみやげをもっても不満そうだった。

①「もう、来年は千絵ちゃんにおみやげなんかもつてかないよ！」

毎回そんな千絵ちゃんの態度にムカついて文句をいうのだけど、お母さんはそれをゆるしてくれなかった。

「ああ、ヤダなあ……」

私はふたたび、雑誌をひらいて今年は千絵ちゃんになにをもっていこうかなやんだ。千絵ちゃんも今年は中学生。「ありがとねー、大事にするっけねー」
私のおみやげに、そんな大人な態度をとってくれてもいい年ごろだ。

「なにこれ」

だけど千絵ちゃんは今年もまた、おみやげをうけると不満そうに顔をゆがめた。

「千絵ちゃんにあいそうって思ったんだけど……」

私はさんざんまよったあげく、アクセサリーショップで千絵ちゃんにあいそうなハートのイヤリングをえらんだ。

「なんかハートってダサイ」

千絵ちゃんはそういうと、捨てるみたいにイヤリングをベッドの上に放りなげた。

「そっかあ……」

私はベッドに放り投げられたイヤリングを見つめた。あげたばかりのプレゼントをこんな風に捨てられたのは、はじめてだった。

②「田舎の子に、このイヤリングのよさはわからないかあ」

私は少しいじわるな気持ちでいった。

「ちよっと、田舎の子ってなによ」

そのムツとした顔を見て、私は覚悟をきめた。今まで千絵ちゃんの失礼な態度にたえてきたけど、もう限界。今年は我慢なんかない。

それでも、八月十六日にある神社のお祭りに、二人でいっしょにでかけなければならなかった。毎年、おばあちゃん手作りのおそろいの浴衣ゆかたを着て、お祭りにでかけるのが恒例こうれいで、さすがに千絵ちゃんもそれをイヤがることはできないみたいだった。

暗くなるのを待って、私たちはそろって神社にむかった。

「千絵ちゃんって、浴衣がすごく似合うね」

二人きりになるのは、おみやげをわたしたとき以来だった。

「いいな、田舎の子はこういう格好かっこうが似合って」

下駄げたをカラカラと鳴らしながら、すっかり日くれた道を歩く。道路にそって流れる小さな川から、さわさわと水の流れる音がする。

「こつちに住んでると、流行とか気にしないでいいんでしょ？」

私はなにかいじわるなことをいわなきゃと必死だった。それはせめられる前に、せめようという私なりの作戦だった。だって千絵ちゃんがこのままだまってるわけないもの。いわれっぱなしなわけないもの。

「東京にいと、去年の服なんてはずかしくて着れなくてさ」

それは「有里ゆりちゃんの肌はだが弱いのは、東京の水がきたねいだてえ」とか「中学受験するなんて東京の子はかわいそー」なんていわれつづけてきた、しかえしのつもりだった。

「いいなあ、2は気楽で」

そして、私が思いつく嫌味いやみは、田舎に住んでいることをバカにすることくらいしかなかった。

「私もこーんな、のどかなところで、のんきにくらしたいよ」

それは、なにかっていえば「東京」の悪口をいわれてきた、しかえしのつもりだった。

「なんなのよ！」

すると、千絵ちゃんが突然とらぜん、もっていたきんちゃくを地面にたたきつけた。

「田舎、田舎ってバカにしないでよ！」

③「3家からだのほうへもどっていったしまった。私はそんな千絵ちゃんのうしろ姿を見つめながら、大きくため息をついた。いじわるをいって、ひどく気分が悪かった。私は千絵ちゃんのきんちゃくをひろうと、自分もまた、今きた道を引き返した。」

玄関げんかんの引き戸をガラガラと開けると、お母さんがあわてたように私をでむかえた。

「どうしたの？ ケンカでもしたの？」

「してないよ」

私は下駄をぬぐと、4 自分たちがねとまりしている客間のほうに向かった。

「でも千絵ちゃん、すぐにおこった顔して一人で帰ってきたわよ」

「知らないよ」

なんだか、ひどくつかれていた。

「千絵ちゃんにあやまってきなさい」

客間にもどると急に力がぬけて、ペタンと床に座りこんでしまう。

「いいからあやまってきなさい」

背後でお母さんの声がする。

「どうして悪くないのにあやまらなきゃいけないの？」

思わず大きな声がでた。

「あなたのほうがお姉さんでしょ？」

お母さんが真正面に座って私の手をとっていう。

「でも私は、千絵ちゃんのお姉さんじゃない！」

私はお母さんににぎられているその手を、パッとひっこめた。

「私はあやまらない！」

お母さんをにらみつけてそうどなりかえした瞬間、④ 頬に衝撃がはしった。お母さんが頬をたたいたのだとわかるまで、少し時間がかかった。

「どうして……？」

とたんに、目からはらはらと涙が落ちた。

「どうして、我慢するのは、いつも私なの？」

お母さんに頬をはたかれるなんてはじめてで、ショックだった。

「どうしてあやまるのはいつも私なの？」

お母さんもまた、私の頬をたたいた手を見つめて、ぼうぜんとしている。

「お世話になってるんだから、気づかうのが当然でしょう？」

お母さんが私の目を見ないままという。

「ちがうよ！」

だから私は思いきっていった。

「お母さんは、私をいい子にしたいだけだよ！」

もう、限界だった。

「お母さんは、光子おばさんに、負けたくないんだよ！」

その言葉に、お母さんがハッとした顔を見せた。

「私が千絵ちゃんより、いい子でいることで、⑤ 光子おばさんより、ずっと上手に子育てしてるって、おばあちゃんにアピールしたいんだよ」

おばあちゃんたちが、お母さんが働いていることをよく思っていないことは、小さいころからわかっていた。

「働いてるせいで子育てを失敗してるって思われたくないんでしょう？」

お母さんが悪くいわれなかったために、おばあちゃんたちの前では、いい子でいるようにしてきた。千絵ちゃんにムカつくことをいわれても、じっとたえてきた。

「だけど、もう我慢するのはイヤ」

お母さんがうつむいて、① 目頭をおさえている。

「いい子でいるのはもう無理なの」

そんなお母さんを見て、私もまたひどくせつない気持ちになった。だけど、もうとめられない。

「もう私、自分の思うとおりにしていいよね」

だまって首をたてにふるお母さんのスカートに、涙がぼたぼたと落ちる。

「じゃあ……」

私はこれでやつと、千絵ちゃんにあやまれると思った。

「千絵ちゃんのところに、いつてくる」

いい子ぶるわけじゃなくて、千絵ちゃんにウソなんかついて気分が悪かったから、自分のためにあやまりたかったのだ。

私は千絵ちゃんの部屋のドアをノックした。

「千絵ちゃん」

返事はなかった。だけど電気もついてるし、部屋の中にはたしかに人の気配があった。

「入るよ」

そっとドアを開けると、千絵ちゃんは浴衣のまま、ベッドにねころがっていた。

「田舎だなんて、バカにしてごめんね」

千絵ちゃんの身体は、壁のほうにむけられていたけれど、ねむってしまったているわけではなさそうだった。

「でも、本心じゃないから」

私は勉強机の椅子に腰かけて、つづけた。

「本当は、私、千絵ちゃんのこと、うらやましいんだ」

机の上に、千絵ちゃんの捨てていったきんちゃくを置く。

「だから、いじわるしちゃった」

そこには、ファッション雑誌が置かれてあった。

「ごめんね」

それはお母さんが作っている雑誌だった。

どうして千絵ちゃんがこんなのもってるんだろう。

「去年の洋服だって、平気で着てるし」

なんとなく、それをめくってみる。

「渋谷にだって、一回しかいったことないし」

「ウソつき」

⑥　そこでようやく、千絵ちゃんが声をだした。

「有里ちゃんのウソつき」

「ごめんなさい」

私は雑誌をめくる手をとめて、姿勢を正した。

「ちがうよ」

すると、千絵ちゃんはゆっくりと身体を起こして、こっちを向いた。

「本当は私のこと、うらやましいなんて思っ
てないくせに」

「ただ私の顔を見ないようにシセンを
そらしている」

「私のことなんか、田舎育ちで、ダサイ
って思ってるくせに」

私とシセンをあわせようとし
ないその顔は、いつもの強
気な千絵ちゃんらしくない、
くもった表情をしていた。
⑦

「お母さんが雑誌の編集者だ
なんて格好いいよね」

ひざをかかえて、まるでひとりごと
みたいにボソボソとつづける。

「私だって、東京に住みたかった」

千絵ちゃんが私をうらやましがる
なんて初めてだった。

「こんな田舎、言葉もきたないし、も
ううんざり」

千絵ちゃんが自分のほうが負けてる
みたいなのをいうなんて、信じられ
なかった。だけど、そんな風にうら
やまし
がられても、私はちっともうれし
くなかった。私のほうが勝ってる
なんて、全然思えなかった。

「だったら私と代わる？」

千絵ちゃんが、ちらりとこっちを
見る。

「うらやましいなんていうなら、私と
代わってよ」

私はそんな千絵ちゃんをじっと見
つめてつづけた。

「お母さんは仕事でいそがしいんだから、迷惑めいわくかけるようなことしないでね」

私はいつもそうやって、お母さんを気づかっていた。

「夕食がコンビニ弁当つづきでも、文句いわないでね」

お母さんをこまらせないようにしてきた。

⑧「夜おそくまで一人です番しなきゃいけないけども、さびしがらないでね」
本当の気持ちはいつもかくしてきた。

「朝はちゃんと一人で起きて学校にでかけてね。お母さんは朝はゆっくりでいいんだから」

だから、自分の思ったことをなんのためらいもなく口にできる千絵ちゃんが、ずっとうらやましかった。

「お手伝いもちゃんとしてね。洗濯せんたくとか食器かたづけるとか、できることはなるべくやってあげてね」

気分屋で、わがままで、自由奔放はんぱう。それがゆるされる千絵ちゃんをずるいとさえ思ってきた。

「格好よく働くお母さんをもつて、そういうことだから」

私はそれだけいうと、千絵ちゃんの部屋をでた。

こんな風に自分の不満をだれかに打ち明けたのは、はじめてだった。ずっと、いつも心の奥おくにしまってきたのに。見せないようにしてきたのに。

私は階段のところに、座りこんだ。こんなことまでいうつもりはなかったのに、我慢がきかなかった。ウソがいえなかった。

⑨「だって、千絵ちゃんがうらやましいなんていうから……」

そんな風に本音をもらすから、つい、私も本音を見せてしまった。けして、うらやましがられるような生活をしてるわけじゃないことを、つい、白状したくなったのだ。

私は大きなため息をついた。

東京に帰る日。

「はい、これ、このイヤリングのお返し」

今、千絵ちゃんの耳もとでゆれているのは、たしかに私があげたものだ。

「これっ！」

⑩ハッと気づくと、千絵ちゃんがムスツとした顔で、紙袋かみぶくろをさしだしている。

「はっ、はい……」

おしつけられるように、紙袋をわたされて、しばしばうぜんとする。

⑪「石鹸せっけんだから」

千絵ちゃんが、おこったような口調のままつづける。

「肌荒れあとかに効くみたいだから」

「……ありがとう」

お礼をいってはみたものの、私はまだなにが起こったのかよく把握はあくできなかった。

だって、今まで千絵ちゃんからプレゼントをもらったことなんて、一度もないのだ。おみやげのお返しなんて、一度ももらったことがないのだ。

「じゃあ」

千絵ちゃんが、さっさと部屋をでていってしまう。

「千絵ちゃん！」

私はあわてて立ち上がると、あとを才エった。

「石鹸、ありがとね」

「ん」

だけど、ふり向いてくれない。

「イヤリングも、つけてくれてありがとう」

「ん」

「来年も、また遊びにきていい？」

思わずそんな言葉がとびだした。

「来年もまた、私、きてもいいかな」

千絵ちゃんは返事をしてくれなかった。だけど、立ち去ってしまうこともなくて、私はその場で返事を待った。じつと待った。

「さびしいなら……」

千絵ちゃんがようやく口を開いた。

「さびしいなら、今度は私が遊びにいつてあげてもいいから」

私に背中を向けたままだったけど、千絵ちゃんはいった。

「東京に……」

最後は、すごくかほそい声だった。

「うん」

⑫ だけど、たしかにきこえた。

「きてきて」

⑬ 東京に、つて千絵ちゃんはいった。

「ぜったいに、きて」

「ん」

千絵ちゃんは小さくうなずくと、ダダダッとそのまま階段をかけあがって、自分の部屋にもどってしまった。

私はもう一度、紙袋の中をカクニ^オンした。

肌の弱い私のために、千絵ちゃんがえらんでくれたプレゼントだ。私はうれしい気持ちでそれをぎゅっと抱^だきしめた。千絵ちゃんと少しだけつながった気がした。

——『いつかふたりで』 草野たき より——

問一

1

に入る最も適切な言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア しかし イ だから ウ そして エ つまり

問二

——線①「毎回そんな千絵ちゃんの態度にムカついて文句をいうのだけど」とありますが、「そんな千絵ちゃんの態度」とはどのような態度ですか。千絵の態度を表している部分を、文中から二十四字で探し、初めと終わりの五字を書きなさい。(句読点は一字と数えません)

問三

——線②「田舎の子に、このイヤリングのよさはわからないかあ」と、「私」が「千絵」にいったのはなぜですか。その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 田舎の子の千絵には、やっぱりこのイヤリングのよさはわからなかったのかと、残念に思ったから。
イ 千絵へのおみやげの選び方を今年も失敗してしまつたと、がっかりしたから。
ウ 年下の千絵にイヤリングが「ダサイ」と生意気なことをいわれて、ショックを受けたから。
エ おみやげのイヤリングを千絵にその場で投げ捨てられて、腹が立ったから。

問四

2

に入る最も適切な言葉を文中から四字でぬき出さない。(句読点は一字と数えません)

問五

——線③「くると身体をひるがえす」とありますが、どのような動作を表現したのですか。答えなさい。

問六

3

4

に入る最も適切な言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア すたすたと イ おずおずと ウ そわそわと エ おろおろと オ とぼとぼと
カ ぶらぶらと

問七 — 線④「お母さんが頬をたたいたのだとわかるまで、少し時間がかかった」とありますが、なぜ「少し時間がかかった」のですか。その理由を「ゝから。」につながるように、文中から探し、ぬき出しなさい。

問八 — 線⑤「光子おばさんより、ずっと上手に子育てしてるって、おばあちゃんにアピールしたいんだよ」とありますが、「お母さん」は、なぜ「おばあちゃん」に「アピール」したいと思っているのですか。説明しなさい。

問九 — 線⑥「有里ちゃんのウソつき」とありますが、「千絵」はなぜ「ウソつき」だと思ったのですか。説明しなさい。

問十 — 線⑦「くもった表情」とありますが、どのような様子を表現したのですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア おこっている様子
- イ 気持ちがしずんでいる様子
- ウ 落ち着きがない様子
- エ はずかしそうにしている様子

問十一 — 線⑧「本当の気持ちはいつもかくしてきた」とありますが、有里の本当の気持ちを答えなさい。

問十二 — 線⑨「そんな風に本音をもらすから」とありますが、「千絵」の「本音」とはどのような内容ですか。答えなさい。

問十三 — 線⑩「千絵ちゃんがムスツとした顔で、紙袋をさしだしている」、—— 線⑪「千絵ちゃんが、おこったような口調のままつづける」とありますが、「千絵」はなぜ「ムスツとした顔」や「おこったような口調」をしていたのですか。説明しなさい。

問十四 — 線⑫「きてきて」、—— 線⑬「ぜったいに、きて」とありますが、このように「有里」がいったのはなぜですか。説明しなさい。

問十五 — 線ア、イの漢字の読みをひらがなで書き、—— 線ウ、エ、オのカタカナを漢字に直しなさい。

二

次の□をうめて、上から下へ、左から右へ読める熟語になるように、後の□の中から一つ選び、正しい漢字に直して答えなさい。

①

尊	
	語

②

予	
	定

③

困	
	問

④

回	
	習

そく・なん・ふく・けい

(五〇分)

得点

問	一

問	二
初	め

問	三

問	四

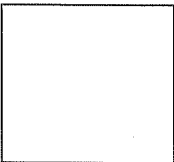
五	問

問	六
3	
4	

問	七
	から。

問	八

問	九



問 十

問 十 一

問 十 二

問 十 三

問 十 四

問 十 五			
エ		ア	
つ た	オ	ば	半
オ		イ	
	カ ク ニ ン		目 頭
		ウ	
		シ セ ン	

二

①
②
③
④